

## ～津田梅子の生き方（7）～帰国後のカルチャーショック～

梅子が帰国した時には、実家は麻布に転居していました。「我が家」に辿り着き、家の扉を開けた梅子は、アメリカでの生活そのままに靴を脱がずに上がっていきます。これには家族も驚いて、靴を脱ぐように梅子に告げたそうです。約 11 年の歳月の中で、梅子は日本の習慣もすっかり忘れてしまっていたのです。また、家族と会話する時も、海岸女学校（現在の青山学院大学の源流のひとつ）を出た姉の琴子か、通訳経験の豊富な父・仙を介さないと、梅子の意思は伝わりませんでした。

11 年ぶりの日本で、梅子は他にもさまざまな苦勞をすることになりました。帰国後間もないある日曜日、築地にある教会の礼拝に出席した帰り道のことです。人力車に乗っていた梅子は、教会に忘れ物をしてしまったことに気づきました。しかし日本語を話せないで、車夫に話しかけることができません。梅子の葛藤などつゆ知らず進む人力車に気を揉んでいるところに、向こうからやってくる顔見知りのアメリカ人の姿を認めました。梅子は声をあげてそのアメリカ人を呼び止めます。日本に長くいるため日本語を話せるこのアメリカ人に通訳をしてもらうことで、梅子はやっと忘れ物を取りに行くことができました。その後もこのアメリカ人には何度か助けられた梅子でしたが、会うたびに「アベコベです」とからかわれた、というエピソードもあるようです。

このように、言葉の通じない母国・日本での生活に苦戦する梅子でしたが、「アメリカ人の目」を持っていることで、当時の多くの日本人が見えないものを見ることもできました。それは、強力な家父長制の存在です。

日本の家では常に父親が一番で、家の後を継ぐ長男や養子が二番、続いて弟達（男子）が偉く、食事もお風呂も何事においても優先される。母親は、父親（夫）はもちろんのこと、長男にも付き従うため、女性の全てが男性の言いなりになっている。しかも女性達はそれを当然として受け入れており、疑問を抱いている様子もありませんでした。梅子も自分の財布を持つことが許されず、何か買う時には父親の許しを得なければならなかったのです。

アメリカの解放的な家族生活を当たり前にして育った梅子は、母国の女性の生き方に大きなカルチャーショックを受けることになりました。父親の希望に沿ってアメリカで中等教育を受けて、しかも優秀な成績を収めて帰国したのに、一人前の女性はおろか、一人の大人、一人の人間としてすら扱ってもらえない。それが何よりショックでした。また、せっかく幼くしてアメリカまで行き、長い時間をかけて様々なことを学んだのだから、その経験を活かして活躍したい。アメリカの女性達のように、社会に出て仕事に就きたい。そんな当然の想いを抱いた梅子に対して、日本政府は報いてはくれませんでした。留学した男性達の多くには帰国後に官職が与えられていたのに、一緒に留学した女子留学生には、社会の中で活躍する道が当然には用意されていなかったのです。



築地 海岸女学校  
（現在の青山学院の源流）跡

一方で、一足早く帰国した永井繁子は、1882 年 3 月にはアメリカで学んできた音楽の技能によって文部省音楽取調掛に採用され、留学中から縁のあった海軍士官の瓜生外吉と結婚しました。その披露宴に出席した山川捨松もまた、会場で知り合った陸軍卿の大山巖に見初められ、結婚することになりました。梅子からしてみれば、自分や捨末は、苦勞してアメリカで積んできた経験をまるで活かしていないように見えました。

そんな梅子でしたが、帰国した翌年の 1883（明治 16 年）に、築地にある海岸女学校で英語を教える機会を得ます。これは 2 ヶ月契約の夏の短期講習のようなものであったので、教える練習のつもりで引き受けました。その後契約の更新を打診されますが、梅子は断っています。貧しい生活をしている生徒に比べてアメリカ人宣教師が贅沢な生活をしているように見えたことや、日本人が蔑視されているように感じたこと、アメリカ人と自分の給料に差があったことが要因と言われており、梅子の理想とはほど遠い当時の日本社会の現実がそこにはありました。

梅子は、ありあまる若さと能力を有しながら、行き場のない悩みに苦しむことになります。



和服を着た梅子（18 歳頃）

【提供】津田塾大学津田梅子資料室